



タイ北部、少数民族による複合的土地利用と生物多様性

1. 地域の概況

タイ国内で最も森林被覆率の高い北部の山地には、カレン、フモン、ラフなどの少数民族が居住する。1970年代における少数民族最大の問題は、ケシ栽培であった。



図 タイ北部メーホンソン県

2. 伝統的な土地利用の中でのケシ栽培撲滅運動

ケシ栽培にかわる商品作物の支援をタイ国王や海外からの支援プロジェクトが推進した。山間の村への道路、電気、清涼な水のなど生活改善とともに、キャベツ、トマト、ニンジン等の高原野菜、果樹、茶、コーヒー等の商品作物が生計向上の成果を上げる。とりわけプロジェクトが力を入れたのが、技術向上を支援し、焼畑ではない、一般的な常畑農業で栽培できる商品作物の導入であった。この方法は、村人のケシ栽培への依存解消と森林および土壌保全を目的として、実際村人の現金収入を伸ばすとともに、焼畑縮小の結果をもたらした。

表 タイ北部少数民族のプロジェクト進展度・平均収入別、土地利用別平均面積 単位:ha

プロジェクト進展度	平均月収 Baht	水田 ha	畑 ha	焼畑 ha	民族区分 村数			
					タイ	カレン	フモン	ラフ
先進 (5村 65戸)	4,830	0.07	1.56	0.24	0	0	4	1
中進 (8村 124戸)	1,683	0.33	0.57	0.37	1	6	1	0
後進 (10村 176戸)	748	0.31	0.22	0.36	0	10	0	0

1995年10-12月調査:先進的なフモン族の村では、畑での高原野菜栽培の比重が高い。後進的な村では畑利用が低い。

プロジェクトが成果を上げることができた理由は3点に絞られる。1)少数民族の生活向上においても独自の文化と自然環境の保全を尊重して、プロジェクトが持続可能な開発をめざしてきた。2)担当部局が要請した現地村への技術指導員の駐在が明らかに示す地

元重視である。3) 村人の主体的な参加が、プロジェクト活動の基本とされてきた。

3. 伝統的利用と生物多様性

伝統的で自給的な水田、畑、焼畑の複合的土地利用は持続的である。少数民族はイノシシ、キョン、リス類、ヤマアラシ、セイザンコウ、ウサギなど野生生物を保全的に利用してきた。現在環境NGOは、生物多様性に配慮し、山間耕地での有機農業を支援する活動等が行われている。



写真 メーホンソン県カレン族開発後進村の焼畑陸稻栽培

出典：松島昇．北部タイ焼畑地域における持続可能な開発プロジェクトによる山地少数民族の村への社会経済上の影響について．2003．『比較社会文化』．第9巻：55-68．